

方正友好交流の会 会報第1号

星 火 方 正

ほうまさ
～燎原の火は方正から～



中国ハルピン市方正県に立つ日本人公墓

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒竜江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と友好の動き、国際的な友愛の精神が広がるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正 ～燎原の火は方正から～

目 次

1. 会の再出発に当たって・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P1
2. 大きな反響を呼んだ再編総会・・・・・・・・・・・・・・・・ P3
3. 「日中の友愛 後世へ」 新潟日報記事・・・・・・・・・・ P6
4. 「友好の原点」交流再び 信濃毎日記事・・・・・・・・・・ P7
5. 「日本人公墓」が特殊な中日友好の重みを支えている
日本新華僑報記事・・・・・・・・・・・・・・・・ P8
6. 旧満州の墓守ろう「日本人も同じ犠牲者」中国側が建立
読売新聞記事・・・・・・・・・・・・・・・・ P10
7. 日本人公墓を風化させるな
日中友好協会機関紙「日本と中国」他・・・・・・・・ P11
8. 「墓は生者に平和を問いかける」 スペンドリニ・カクチ・・・・・・・・ P13
9. 再編総会に寄せられたメッセージ・・・・・・・・・・・・・・・・ P15
10. 中国からよせられた祝電・・・・・・・・・・・・・・・・ P17
11. ニュース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P18
12. 方正友好交流の会 規約 役員人事・・・・・・・・・・・・ P19
13. 書籍のご案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P20
14. 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P21

会の再出発に当たって

方正友好交流の会
事務局長 大類善啓

日本人公墓は、ほとんどの日本人に知られていない。中国通といわれる人々の中でも知られていない。中国通のジャーナリストや中国研究家も知らない。このことは、何もその人たちが無知だからではない。中国政府も恩着せがましく公墓の存在も建立したこともPRしなかった。本当に悲惨な目に遭われた遺族とその関係者、日中友好運動に携わった中の数少ない人たちの間にしか、公墓の存在は知られていなかった。

国際的な友愛精神の賜物

日本人公墓の建立は、いわば中国人民の深い愛情、国際的な友情の賜物だと思う。新中国が成立してまだ10数年しか経っていない時期に建立された日本人公墓は、「人民中国」が生き生きとし、文字通り国際的な連帯の熱い気持ちが脈々として波打っていた時代だといえるだろう。

中国は今、良かれ悪しかれ、ナショナリズムが台頭している時期である。地理的に接近している国同士が、お互いにナショナリズムを高揚させている限り、たぶん良好な関係はもてないだろう。このような時代状況の中、日本人公墓が国交回復以前の1963年段階で、中国の中央政府が認め、誠意ある心をもって建立されたという事実を知れば、多くの人たちは、ある感慨を持つのではないか。現在の中国の青年たちもこの事実を知れば、かつての日中の熱い友愛の物語を想起し、深い感動を覚えるのではないだろうか。

日本人公墓が日本だけでなく、中国の人々の中に周知されていけば、日本人公墓の存在は、悲惨な歴史の中から浮かび上がってくる大きな宝石のような存在になるだろう。その意味でいえば、方正の地は、日中関係がどのような状況にあっても、友好の思いを呼び戻してくれ、日本と中国との、いわば魂の絆をしっかりと結びつける大地といえるのではないか。

とりわけ、日中関係が未熟で、政治的に良好な関係が出来ていない現在、この公墓の建立の由縁を多くの人たちに知ってもらう意義は大きいと思う。

日中共同で維持・管理を！

このまま、公墓の維持・管理を中国に甘えていていいのだろうか、という声が以前から我々の中にあった。しかし、一方的に日本側で維持・管理するのではなく、長年に亘って公墓を維持・管理していただいた中国側の大きな好意を、

今後、後世に伝えていくためにも、日中が共同で維持・管理していく方向で考えていきたいと思う。具体的には各方面と話し合っただけ進めていきたい。

この再編総会を準備する過程で、日中友好協会の機関紙「日本と中国」には当会の活動を大きく掲載して頂き、また朝日、読売にも再編総会開催案内記事を掲載して頂いた。改めて御礼申し上げたい。

その「日本と中国」を読まれた方の中に、3度も黒龍江省に農業機械の指導で行かれた山本義輝さんという方から私に電話があり、いろいろ資料も送付して頂いた。その中で、こういう提案があった。

「開拓団が入植したのは不毛の荒野かと思っていたが、実際には一番肥沃な農地だった。そこを追われた中国農民は以後、悲惨な生活を続けねばならなかった。そこで考えたことは、日本人公墓や養父母の墓、各種日本側団体による友好の記念碑はあるが、開拓のために土地を追われた中国農民に対するお詫びか、慰霊碑のようなものが無いことだ。『方正友好交流の会』の事業として考えたかどうか」という提案である。

中国人慰霊碑の建立を

以前にも、日本人の慰霊行事を受け入れてくれた半面、「中国人の感情を害する、中国人の中には快く思わない人もいる」と聞いたことがある。また南方方面の日本人遺骨収集に当たった時、日本人の兵士たちから散々な目にあった現地の人々が、決して快く思っていなかったという事実を聞いたことがあった。

そのような事実思いを馳せる時、肥沃の土地を奪って被害を与え、また悲惨な状況に追いやった中国の人々に対する謝罪と慰霊を込めた記念碑を建立することの重要性を認識した。ぜひ日本政府に、この建立を働きかけたいと思う。

ドイツは、ユダヤ人大量虐殺の犠牲者を慰霊するため、大規模な「ホロコースト記念碑」を今年ベルリンに建設した。市民運動から始まったこの運動は、反対意見もあったが、粘り強く、17年の時を経て建設された。

日本の中世・近世には、仏教の「怨親平等」思想の影響で、敵味方の戦死者を共に弔うという慰霊の方式が存在したといわれている。

自国民だけを慰霊するのではなく、日中双方の犠牲者の慰霊碑の建立を通してこそ、日中が永続的に良好な関係を築いていけるのではないか。そのためにもぜひ、この声を広げていきたいと思う。

実はここまで書いてきて、過去の資料を見ていたら、石井貫一前会長は『日中（中日）永久不戦の塔（中日犠牲者慰霊の碑塔）』建立の提案をしたという記述を見つけた。今までは活動も不十分であったため、その声は広がらなかった。しかし今後は、小さい会であるが、多くの方々のご支援を頂いて、掲げた活動目標に向けて進んでいきたい。改めて皆さんのご協力をお願いする次第です。

大きな反響を呼んだ再編総会

「方正友好交流の会」の再編総会は、6月19日（日）午後1時から都内・中央大学駿河台記念館で開催された。当会の活動が、日中友好協会の機関紙「日本と中国」で大きく紹介され、また朝日、読売両紙の都内版に開催案内記事が紹介されたこともあり、私たちが当初予想した以上に参加者が多く、50名近い参加があった。

会は奥村正雄の司会で進行、まず牧野史敬から、今日に至るまでの経過報告があった。牧野は、1998年に「ハルビン市方正地区支援交流の会」が設立され、ODAを活用した農業支援や、外務省の草の根無償資金援助制度による私立・方正日本語学校への視聴覚機材や日本語教材の援助を行ってきたこと、そして前会長石井貫一氏が中国国家友誼賞を受賞して発刊された石井貫一編著の『日本と中国・その底辺を翔けた70年』、また『風雪に耐えた日本人公墓 ハルビン市方正県物語』を刊行後、会の存続について関係者が協議し、今日に至った経緯を述べた。（詳しくは、『ハルビン市方正県物語』を参照されたい）

次に木村直美から規約案、大類善啓から活動目標、南誠から役員人事の説明があった。（別添参照）

活発な意見交換

その後、質疑応答に入った。会の名称については、インターネットの時代ゆえ、会の存在を検索しやすいように、方正の前に中国や日中をつけてはどうかという意見が出た。実は以前からこの名称については、世話人の間では十分に討議したつもりであったが、若い世代のようにインターネットから見る視点がなかった。しかし後日、若い人たちから、文章の中に日中や中国が入っているとインターネットでも検索できるので心配はないとのご教示を受けた。

また、各紙が予想を越えて本会の活動を大きく報道して頂いたので、敢えてこの段階で名称を変えるのはかえっておかしくなるという意見で関係者の考えが一致した。それ故、結果的には当初のように、名称は、「方正友好交流の会」として活動していくことにした。このことをご了承してください。

参加された方々は、開拓団の家族の一員として、あるいは父親の仕事の関係で旧満州に居住された方、また方正を最近訪問された方などが多く、体験を交えて貴重な発言があった。会の状況については、新潟日報や信濃毎日などが、会の本意を汲んだ記事を大きく掲載して頂き、ここでは敢えて内容の重複は避け、各紙の記事を読んで頂きたい。

その後、顧問に就任された社団法人 日中科学技術文化センター韓慶愈理事長からは、氏の体験を踏まえた挨拶があった。韓慶愈氏は、旧満洲時代の旧制中学の時、日本に留学された。留学が決まった時、母親からは「こんなにひどいことをする日本は戦争に負けるに決まっている。危ない日本に行くことはない」と反対されたが、父親は「若いうちは、外

に出て苦勞することが大切だ」といって留学することに同意してくれたという。

留学先の茨城県常陸太田中学では、「校長を始め同級生などがみんな親切だった。悪い人間ばかりだと思っていた日本で、こんなに親切にしてくれる。その時、日本人も中国人も同じなのだと実感した。先の戦争で悲惨な目にあった日本人のお墓を中国政府と中国人民が建立してくれたが、これも同じ人間なのだという思想が息づいているからだと思う」と語った。

また、強制労働に従事させられた花岡事件の犠牲者に対する保障基金に携わっておられる田中宏・龍谷大学教授、京都大学大学院生として方正の日本人公墓のありようを「中国人の寛容さ」という視点から研究されている坂部晶子さん（多元的世界における寛容性についての研究―「満州」移民をめぐる寛容さの記憶―という研究）などからご挨拶をいただいた。

広がった反響

当日はまた、前述した新聞のほか、朝日、読売、「日本と中国」、日本新華僑報などの記者の方々も取材に見えた。

3時間近い会を終えた後は、会場近くで懇親会を開いた。ここで自己紹介を行いながら歓談した。「自国だけに通じる歴史認識はおかしい」「父がいた旧満州を取材している」という30代前半の若い世代の参加者もいて、懇親会也大いに盛り上がった。

翌日からさまざまな形で再編総会への反響があった。

会に参加された山村文子さんから翌日、便箋7枚の手紙を頂いた。山村さんの手紙は次のようなものであった。

「皆様の熱心な話し合い、会の趣旨に賛同して帰ってまいりました。旧満洲での災禍は、全く日本が起こした戦争が原因であり、当時大人であった私もその一端を担っておりました。結果として中国の方々に、言葉では言いあらわせない痛苦をあたえてしまいました。受けた教育をうのみに信じ、相手側の苦しみを考えることなく、戦果の発表に万歳を叫んでいたことは私の生涯の痛恨事です。

旧満洲は決して五族協和の王道楽土ではなく、庶民の私でも日本人と他の民族との差別は歴然とわかりました。私が住みましたチチハルの憲兵隊のこわさは今も忘れません。城内に住んでおりましたが、すぐ近くの胡同の張惠民氏が拷問の末、獄死され、妻子のその後を知ったのは十三、四年前のことでした。開拓団を送りこんだ農地が中国農民の耕作していた土地であったことを知ったのも戦後のことでした。知れば知るほど申しわけなく、かつて彼の地に住んだ者として罪の深さを感じております」

方正県の独自性

そして山村さんの手紙は、敗戦近い状況に関東軍などがひた隠しにしながら、自分たちだけの家族を避難させ、取り残された同胞も避難民も自国が起こした戦争の犠牲になった

こと。また、1年間長春で難民生活の後、自分がこうして帰国できたのは中国の人々の温情のお陰であること。衣食住に困る自分に、土工のような仕事をくれ、代償も払ってくれ、「コーリャン」を買って生き延びることが出来たと綴られている

そして、「昨日、日本人公墓が他にもあるのではないかという発言がありましたが、他にあるはずがなく、もしあったとしたら中国の方々に申しわけなく思います。方正は例外であり中国の方々の広いお心に感動し感謝しており」「敗戦時に私が受けた中国の方々の親切反対の立場だったら私にできたろうかと思ひます」と書かれている。

改めてその時の時代状況を活字でしか知らない者にも、当時の社会状況や雰囲気は鮮明に伝わってくる手紙だった。

山口淑子（李香蘭）さんからも電話

また読売新聞が夕刊の全国版に、当会の理事に就任した残留3世の今村幸江さんと祖母のヤ江さんを紹介しながら、『「日本人も同じ犠牲者」中国側が建立』という見出しで、公墓と当会の活動を紹介した。この記事の反響は大きく、その日の夕刻から私のところに電話が4本ほど入った。その中に、かつて李香蘭として一世を風靡した山口淑子さんからの電話には驚いた。山口さんも、日本人公墓が存在していたことは知らず、現在のような不協和音が目立つ日中関係だからこそ、この公墓の存在を知ってもらふ意義は大きいと、我々が考えていたことと全く同じ意見を述べられ、ぜひ会の活動を支援したいという心強い言葉を頂いた。

翌日は朝から電話が殺到した。多くは、日本人公墓の存在を初めて知ったこと、会の活動に共感共鳴したので支援をしたい、カンパをしたいという申し出である。このような電話が20件ほどあった。

改めて当会の活動の意義を確認しつつも責任の重さも感じた次第である。

なお、事務局体制がまだ十分でないので、活動目標を具体的にどう進めるかについては、更に関係者と相談し詰めていきたいと思う。

入会のお願い

当面、当会の活動に賛同される方、関心をお持ちの方々にご入会頂ければと思います。年会費は、

個人会員 一口 1,000円 団体、法人会員 一口 10,000円

とします。口数は最低一口、上限はありません。これにより資金を調達し活動を進めていきたいと、振替用紙を同封させていただきましたので、よろしくお願い申し上げます。なお、すでに何人かの方々よりカンパをお寄せ頂きました。最後になりましたが、改めてここで御礼申し上げます。

（大類）



会の創設総会に集まったのは約五十人。終戦後の混乱の中、旧満洲国（現在の中国東北部）で親族を失った人々が、大勢をもちつて来た人々が大半だったが、その中に交じって大学生らしき数人の若い男女が目をつけた。彼らは中国残留孤児の二世、三世だった。

満蒙開拓団公墓で交流会発足

六十年前の一九四五年八月、現在の中国黒龍江省ハルビン市郊外にある方正県に、ロシア軍の攻撃にさらされた満蒙開拓団民が各地から雪崩をうって集結した。だが食料も暖房も医薬品もなく、厳寒の荒野に放置された人々は翌四六年春までに、飢えや凍死、病気で死んだ者が次々とたがれ推計五千人を超えたとされる。その後、黒龍江省政府の手で四千五百余体の遺骨を納めた方正日本人公墓が立てられた。靖国参拝や歴史認識などで中日両国が対立感を深める中、この日本人公墓のことを広く世に伝えようと「方正友好交流の会」が六月末、東京・神田駿河台で発足した。

（編集委員・望月通洋）

歩へ 日中の友愛後世へ

方正友好交流の会再編総会
2005.6.19



戦後60年近くを日本で暮らす日中科学技術文化センターの韓慶愈・理事長も総会で発言。「日中両国は友好国だったのに…」と今の対立状況を憂えた。東京・駿河台の中央大学記念館

◆私の靖国◆
総会で経過報告をした

現地の協力深く感謝 2、3世も懸け橋へ行動

農業技術支援や日本への牧野史敬さんは「方正の留学援助などを続けた。人々に対し、日本政府からの謝辞が送られる日まで九十四歳で亡くなった。組織をどうするか支援者らは今日まで長い議論をしてきたという。」

で、「と会の目的を訴え、長を団長に引き揚げた。途中で千三百人も死な、司会役の奥村政雄さん（新築田出身）や補佐の木村直美さん（元自民党政調会調査員）も「生前の石井さんは常々、日本人が万難を排してやらなきゃならんことを、方正の人々に押しつけてしまってきた。方正の慰霊、それが私の靖国だ」と語り続けた。参加者からの発言も次々とあった。東北三省で、文化大革命で破壊された。毛沢東の解放軍に、私は、日中です」と

◆事ある危機感◆

方正の日本人公墓のことは生存する開拓団の人々にもあまり知られていないという。日中間の政治的な緊張の高まりを反映してか、日本人公墓への訪問にも最近では不安が付きやすくなった。練習をたいたり献花や供え物など公然とした墓参の形が取りにくくなったという。会の人々はこうした環境変化に危機感を募らせている。

の各地に四五五年冬に避難した人々の遺骸の山が、あるはず。しかし場所の特定ができず、日本政府に働きかけてもらいが開かず、引き揚げ者だけでなく、その墓参するだけだった。

また、事務局に文書を託し「開拓団が入った土地は荒地地じゃなく、中国した三世の藤原知秋さん。

協力した日本軍人の墓が、千九百九十七人の中国残留孤児が国家賠償を求めた。方正の友好のいしすえであるが、何人かが原団の聞き取り調査活動を行っていた。吉林省から九〇年に帰国した三世の藤原知秋さん。



「方正日本人公墓」 仮の墓標が部と折衝、遺骨の回収と埋葬、日本人公墓の建設に95年には孤児たちを育った松田ちよ子さん（91年）に帰国し現在、埼玉県在住の松田さんが奔走、周恵米総理も動いたという。64年10月「方正地区日本人公墓」の墓標が立つ。埋葬の遺骨は約四千五百体。旧満洲人脈や政府筋に方正への支援を訴えた。

「内モンゴルの興安嶺にいた。軍がもめた殺になつてしまい、町内会

方正日本人公墓が北京の国務院、外交部麻山事件五百三十人の遺骨も84年に隣へ、さら

中国・黒竜江省の「日本人公墓」

『友好の原点』 交流再び

戦後60年を機に活動を再開し「方正友好交流の会」として開いた総会―東京・千代田区



市民団体が新たな出発

満州開拓団員らの遺骨を納めた「日本人公墓」のある中国黒竜江省方正県と交流してきた市民団体が十九日、都内で活動を再開した。会長の死去に伴い休止状態だったが、戦後六十年の今年、公墓の存在を多くの人に知ってもらうため、冷え込んでいる日中関係の改善につなげたいと再出発を決めた。祖母が県内出身の帰国三世が役員に加わり、若い世代が活動の中心を担って友好促進に取り組む。

この日は都内で、全国から約五十人が参加して活動再開の総会を開いた。会の名称を「方正地区支援交流の会」から「方正友好交流の会」と変更し、祖母が下伊那郡平谷村から満州に渡った帰国三世で京大大学院生の南

若い世代の力で 県内からも役員

誠さん(29)、県日中友好側に甘えていいの協会副理事長で、父が元かとの指摘が出た。あ開拓団員の寺沢秀文さんらためて公墓の存在を目(51)同郡松川町から千中友好に役立てることを四人を新役員に選んだ。話し合いでは、日中国本側負担とするために政交正常化よりも前に公墓府に働き掛けることなどが建てられたことについて「中国側の深い愛情、友情のたまもの」とする。会が訪中した際は、反日意見や「維持管理を中国感情の高まりもあり、公

● 日本人公墓 日本人公墓は1963年、戦後の混乱で満州(中国東北部)で亡くなった開拓団員らの遺骨を集め、方正県が建てた。中国側に感謝の意を示し、公墓の存在を知らせる目的で93年に、開拓経験者や日中友好活動に携わる長野県を含む全国の人が「交流の会」を結成。方正県に農業振興のための技術者を派遣したり日本語学校に教材を提供した。2002年、新潟県出身の石井真一(会長)が亡くなった後に、活動が停滞していた。



中国・黒竜江省方正県にある日本人公墓＝今年4月

墓で予定していた慰霊行をしたい」と思いをあらわすが省政府の要請で初めてにしていた。中止される事態になった。昨年、方正県を訪れた類善啓さん(60)東京の機会があり公墓の存在は「公墓は日本でも中国を初めて知ったという南でも、あまり知られていない役員に選ばれ、公本側負担に限り、日墓は、人間同士の友好を本若い世代に活動に参思い起こさせる原点だ。加してもらい、あらたな日中双方の若者に、存在日中関係を考えていって一を知ってもらう取り組みほしいと期待している。

“日本人公墓” 承载着特殊的中日友好

方正友好交流会重新开展活动

◆本报记者 黄文炜

6月19日,方正友好交流会在东京举行成立大会,这个会的前身是1993年5月成立的哈尔滨市方正地区支援交流会,曾经为方正县的农业发展及日语教育做出了贡献。2002年因会长石井贯一去世,交流会的活动三年来处于停滞状态。方正县之所以与日本有着特殊关系,因为那儿有一座中国唯一的日本人公墓,40多年来见证和记载了特殊的中日友好。

在中国黑龙江省哈尔滨市方正县境内,有一座中日友好园林,距方正县城7公里,距哈市171公里,园林包括方正地区日本人公墓、鸡西市麻山地区日本人公墓、中国养父母公墓、藤原长作纪念馆、纪念碑、门楼等。该园林是报经当时国务院总理亲自批准,于1963年5月4日兴建的,当时公墓内合葬5000多具日伪时期日本开拓团国民的遗骨,他们大多是日本战败后,1945年秋冬撤退到方正县冻、饿、病死的无辜妇女和儿童。1984年10月,黑龙江省政府又将鸡西市麻山地区日本人公墓(墓内合葬当地开拓团妇女、儿童遗骨500多具)迁葬到此,在此基础上建成一个1.4万平方米初具规模的“中日友好园林”。1995年日本遣孤返藤勇投资220万日元,为曾养育自己的中国父



◆方正友好交流会在东京举行成立大会。

母修筑了“中国养父母公墓”。中日友好园林每年都吸引大批日本各界代表团来此拜谒以及探亲访友,方正县与日本山形县大石田町村、长野县泰阜村建立了友好关系。

中日友好园林还记载着日本水稻专家藤原长作的故事。1983年,藤原长作老人应邀到方正县传授寒地水稻旱育稀植栽培技术,他在参观了中日友好园林之后,内心受到了极大触动,他说自己虽没有亲身参

加过侵略战争,但只要站在这个中日友好园林中,身为一个日本人就有一种对中国人民战争负罪感,作为一个日本人就会对中国人民善待加害民族中无辜妇女和儿童,以德报怨的行动,充满了感恩之情。

藤原长作老先生先后6次以70岁高龄之躯,自费来中国,坚持不要任何报酬,吃住在农民家里,手把手的教中国农民新技术,使方正县水道亩产由三、四百斤,达到上千斤。藤原长作老先生故后,其家属也遵其遗嘱将骨灰的一半葬在他所眷恋的方正县。日本人公墓即使在“文革”中也得到了很好的保护,并未受到冲击,可是,如今由于资金严重短缺等原因,

园林管理一度陷入困境,每年日本各友好团体到此参观,都提出要种植和平友谊纪念树,可是现在没有植树的场所。由于年久失修方正地区日本人公墓和麻山地区日本人公墓的墓顶龟裂,纪念陈列馆因为相当狭小,相当一部分展品无法展出,而且房屋和地面破损严重。

方正友好交流会这次重新开展活动的目的—是为了在中日之间广泛宣传方正的日本人公墓,最终让日方负担起公墓的维持与管理,二是以方正为中心开展活动,让承载着特殊的中日友好的“日本人公墓”成为中日友好的纽带之一,让中日的年轻一代都能认识到过去的战争给两国民众带来的不幸,认识到中日友好的重要性。■

「日本人公墓」が中日友好に特別の重みを支えている

6月19日、方正友好交流の会が東京で設立総会を開いた。この会の前身は1993年5月に創立されたハルビン市方正地区支援交流の会で、かつて方正県の農業の発展や日本語教育に貢献した。2002年石井貫一会長がなくなった後、交流会の活動が停滞した。方正県と日本が特別な関係を持つというのは、ここに中国で唯一の日本人公墓があり、40年余にわたってユニークな中日友好を見届け「記録」して来たからである。

中国黒龍江省ハルビン市方正県に中日友好庭園がある。方正の町から7キロ、ハルビン市から171キロ、庭園には方正地区日本人公墓、鶏西市麻山地区日本人公墓、中国養父母公墓、藤原長作記念館、記念碑、門楼などがある。この庭園は当時の周総理の批准を経て1963年に作られた。このとき公墓には5000名あまりの、旧満州開拓団員の遺骨が葬られている。彼らの大部分は日本の敗戦後、1945年の秋から冬にかけて方正県に逃げて来、寒さと飢えと病気で死んだ、罪のない女性と子供たちである。1984年10月、黒龍江省政府はまた鶏西市麻山地区日本人公墓（お墓の中にはその地の開拓団婦女子の遺骨500体あまりが合祀）をここに建立した。こうした基礎の上に立って、1.4万平方メートルの規模の「中日友好庭園」が作られた。1995年日本の残留孤児・遠藤勇は220万円を投じ、自分を養育してくれた中国の父母のために「中国養父母公墓」を建てた。中日友好庭園は毎年、多くの日本各界の代表団を引き寄せ、かれらはここで会い、親戚友人を訪ね、方正県と山形県大石田町、長野県泰阜村と友好関係を打ち立てた。

中日友好庭園にはまた、日本の稲作専門家・藤原長作さんのことを記している。1983年、藤原長作老人は招かれて方正県に来、寒冷地稲作稀植栽培の技術を伝授した。彼は中日友好庭園を見学して大変感動した。彼は、自分は侵略戦争に参加しなかったけれども、この中日友好庭園に立てば、一人の日本人として、中国人に対して、戦争の罪悪感を持つ、一人の日本人として、中国の人民が加害民族の婦女子に対して、恨みに報いるに徳を以ってなした行動に対して大恩を感じる、と語った。

藤原長作老先生は、70歳の高齢を押して、自費で6回、中国に来、いかなる報酬も受けとらず、農民の家に寝泊りし、中国の農民に手をとって新しい農業技術を教えた。その結果、方正県の水稲の反当り収量が3～4000斤から1000斤以上にまで上がった。藤原老先生が亡くなられてから遺族は遺言に従って遺骨の半分を彼の愛してやまなかった方正県に葬った。日本人公墓は「文革」にも非常にうまく保護され、破壊されなかった。しかしいまは資金が不足して庭園の管理が苦境に陥った。毎年、日本の各友好団体がここへ見学に来て、平和友好の記念植樹をしたいと申し出るが、現在、もう植樹する場所がない。長年にわたって修理できなかった方正地区日本人公墓と麻山地区日本人公墓には亀裂が走り、記念陳列館は手狭なため、一部の展示品が並べられない。その上建物や地面の破損が重大である。

方正友好交流の会が今回、改めて活動を繰り広げる目的の一つは、中日間に広範に方正の日本人公墓を知らせ、最終的には公墓の維持管理を日本側で負担すること、そして方正を中心（テーマ）に活動を繰り広げ、中日友好の特別な重みを持つ「日本人公墓」を中日友好の絆の一つとして、中日の若い世代に過去の戦争が両国の民衆にもたらした不幸と中日友好の重要性を認識させることである。

（奥村正雄 訳）

「日本人も同じ犠牲者」中国側が建立

「友好の原点」残留2世ら動く

旧満州の墓守ろう

戦後60年

中国東北部・黒龍江省のハルビン市方正県に、旧満州入植者のために中国側が建てた「日本人公墓(共同墓地)」がある。日中両国の専門家にもあまり知られていないこの墓を、友好の礎と考え、維持費を負担するなどして交流を進めようと、中国残留日本人の2世、3世たちが活動を始めた。戦後60年、そして日中関係が冷え込む中、「二つの祖国」に思いを込めて――。



●残留婦人の祖母、今村ヤ江さん(左)から日本人公墓の由来を聞く残留3世の春江さん●数千人が埋葬されている方正県の日本人公墓(方正友好交流の会提供)



1945年8月の終戦前、旧満州各地にいた日本人は、旧ソ連軍から逃れようとして、関東軍の補給基地があった方正を目指した。男性は戦死を遂げたため、多くは婦人や子供だった。帰国できずに迎えた冬は厳しく、人々は飢餓や伝染病で次々に倒れた。その数は3000人とも5000人とも言われ、遺骨は

野ざらしとなった。生き延びた残留婦人たちは、旧ソ連軍から逃れようとして、関東軍の補給基地があった方正を目指した。男性は戦死を遂げたため、多くは婦人や子供だった。帰国できずに迎えた冬は厳しく、人々は飢餓や伝染病で次々に倒れた。その数は3000人とも5000人とも言われ、遺骨は

命の懸念も異は破壊から守った。公墓の由来を知る残留婦人・孤児たちも高齢化

方正生まれで82年に日本へ来た。また、京都大学で日本人帰国者の問題などを研

村春江さん(34)(東京都練馬区)は幼いころから祖母のヤ江さん(84)に、開拓団の悲劇や戦争の悲惨さを伝え聞かされてきた。帰国後は日本人にならなければ、と思い込んだ時期もあったが、反日デモのニュースを聞いた時は、二つのふるさとの間で引き裂かれるような気持ちになったという。そんな中、旧交流の会」のメンバーから「会を若い人に委ねたい」と頼まれ、「生まれ故郷に友好の原点があることを伝え、少しでも日中の衝突を減らしたい」と考えて引き受けた。

方正生まれで82年に日本へ来た。また、京都大学で日本人帰国者の問題などを研

2005年(平成17年)6月8日

日本人公墓

悲劇忘れず交流再開

黒龍江省方正県
支援交流の会 継続へ19日に総会

中国の黒龍江省方正県
との交流を進めてきた
「方正地区支援交流の
会」が19日、再出発のた

め、の総会を開く。
方正地区では、敗戦前
後の混乱で約5千人の日
本人が飢えや病気で死亡

したといわれている。そ
うした日本人たちのため
に、地元の方正県政府が
63年に「日本人公墓」を

建設した。同会は公墓の
存在を広く知らせるた
め、93年に発足、同県の
農業発展や日本語教育の
支援もしてきた。しか
し、会長が02年に亡くな
り、会の活動は休止状態
だった。

を風化させてはいけな
い。会の継続を決めた。
再編総会は、運営を若い
世代に託すため、これ
までの経過や今後の活動
について話し合う。

呼びかけ人の大類善啓
さんは「関心のある人に
できるだけ多く参加して
もらいたい」と話す。

総会は午後1時から千
代田区神田駿河台3の11
の5の中央大学駿河台記
念館330号室で。詳し
くは大類さん(13日以降
に勤務先の日中科学技術
文化センター、03・32
95・0411)へ。

戦後60年の今年、中国・黒龍江
省の方正県にある「日本人公墓(共
同墓地)」の存在を広め、友好活
動を進めようと、休眠中だった市
民団体「方正地区支援交流の会」
が19日、都内で再出発の総会を開
く。同会は「公墓を両国の交流の
原点と位置づけ、冷え込んだ日中
関係を改善する一助にしたい」と
し、広く参加を呼びかけている。
この公墓は、日中国交回復前の
1963年、中国政府が建立した

中国の日本人墓地
通じた交流再出発

もので、終戦後に飢えや病気で死
んだ日本人入植者約5000人の
遺骨が納められている。同会は中
国側への感謝を示そうと93年に発
足、方正県の教育支援などを続け
てきたが、2002年に会長が死
去した後は活動が停滞していた。
総会は午後1時から、中央大学駿
河台記念館330号室(千代田区
神田駿河台3)の問い合わせは、日
中科学技術文化センターの大類善
啓さん(03・3295・0411)へ。

(社)日中友好協会機関紙 「日本と中国」
2005年7月5日号 第1904号 1面に掲載

日本人公墓を風化させるな
「方正友好交流の会」が再編の総会

「方正友好交流の会」
の再編総会が6月19
日、東京で開かれ、約
45人が参加、交流の会
の再出発を確認した。

中国・黒龍江省方正
県で終戦当時、日本が



らの入植者約5000
人が飢えや伝染病で亡
くなった。1963年
中国側の手で「方正地
区日本人公墓」が建て
られた。その方正県と
交流を進めていた日本
の「方正友好交流の会」
は柱になっていた人が
2002年に死去、活
動が停滞した。このま
までは日本人公墓が風
化してしまう」との呼
びかけで、再出発の総
会が実現した。

総会では規約や役員
を決め、「日本人公墓」
の存在を広く知っても
らうことや中国側負担
の公墓の維持管理費用
を日本側負担に切り替
えることなどを当面の
「活動目標」として明
記した。

事務所は東京都千代
田区神田小川町3-1
6、(社)日中科学技
術文化センター。

「墓は生者に平和を問いかける」

スベンドリニ・カクチ

遠藤勇さん(65)は、日本人孤児の世話をした中国人養父母のために公墓を建立した。第二次世界大戦末期、開拓移民であった親たちがソ連軍や中国軍に追われて避難したために、多くの日本人の子どもが中国東北部に棄てられ孤児となった。

「とても貧しい中国の養父母のために公墓を建立することは、多くの日本人孤児の面倒をみてくれたことへのせめてもの恩返しなのです」と遠藤さんは語る。遠藤さんがかつての日本の植民地「満洲」に置き去りにされ、孤児となったのはわずか6才のことであった。

帰国したほかの残留孤児と同じように、遠藤さんは日本という敵国の子どもでありながら世話をし、学校にまで行かせてくれた中国人養母のやさしさは決して忘れられないという。

20世紀初頭に「満洲」を植民地化した日本軍には、数多くの中国民間人に対する略奪や殺戮に対して責任がある。

「中国の養父母の助けがなければ、私はいまこうして生きていないでしょう。その養父母から学ぶべき教訓があります。彼(女)たち先人は、日本に悔い改めることの価値を教えるのです。そしてそれこそ、日中の敵対心を乗り越えるために最も大切な一歩なのです」と遠藤さんは語る。

この中国人養父母の公墓はハルビン市郊外の方正県にある。方正の地が選ばれたのは、遠藤さんが日本人難民収容所にいて養父母に引き取られた場所であったこともあるが、2つの日本人公墓がこの地に建立されていたからである。一つは開拓民たちが集団自決した麻山事件の犠牲者の公墓であり、もう一つは日本の敗戦後、日本の国家に見捨てられ死んでいった開拓民たちの公墓である。

このような公墓が日本人の手ではなく、中国政府・中国人民によって建立されていたのだ。とりわけ後者の「方正地区日本人公墓」は、日本と中国が国交を回復する10年ほど前の1963年に建立されたことである。ただ残念なことに、日本では公墓の存在が一般に広く知られることはなかった。

しかし第二次世界大戦に終結をもたらした連合軍に対する日本の敗北から60年、平和活動家らは日本政府に戦争の歴史を認めさせアジアの犠牲者に謝罪させるべく、この公墓を日中友好のシンボルとするキャンペーンを始めたのである。

「日中関係は1972年の国交正常化以来、最悪の状況にあります。日本人残留孤児の努力やその他中国での活動を広く知ってもらうことで、私たちは市民や政府に過去を受け容れることを学んでほしいのです」と、市民団体「方正友好交流の会」事務局長の大類善啓さんは語る。

研究者らはその根拠を指摘する。日中戦争研究の専門家、日本学術振興会の坂部晶子さんは、旧満洲で日本民間人のために建てられた2つの公墓を、日中和解の感動的な例としてとりあげる。

「戦後公墓が建立されたハルビン市郊外の方正県は、かつては日本陸軍の根拠地でした。そのため敗戦後、奥地の日本人開拓民はこの地を目指して避難したのですが、結局日本軍に見捨てられたのです」と坂部さんは説明する。

公式な記録は発表されていないが、活動家らは終戦時2万人の日本人民間人が残されたと推定している。

中国政府が日本人死亡者のための公墓を許容したという事実は、日本の市民に中国の寛大さを知ってもらうためにもっと広く伝えられるべきだと大類さんは語る。

また大類さんは、日本が戦犯を祀る靖国神社をめぐる論争に直面し、新しい戦没者追悼施設を建設する可能性を議論しているいまこそ、中国にある日本人公墓の教訓はひときわ重要な意味をもつと語る。

小泉首相の靖国神社参拝、そして日本の侵略行為に対する言及をうやむやにしようとする姿勢は、中国や南北朝鮮をはじめ、日本軍に植民地化された国々の怒りを招いている。

小泉は靖国神社―死者を埋葬するというより神格化する場所―への参拝を、単に平和を祈念するものだと言言するが、中国や南北朝鮮のように日本帝国の侵略の犠牲となった国々は異なるかたちで受け止めている。

自衛隊の1000人部隊をイラクに派遣したことに示されるように、日本が自衛隊により積極的かつ国際的な軍事的役割を与えようとするにしたいが、近隣諸国なかでも中国において抗議の声が高まっている。

かつての植民地は日本が過去の暴虐を認めていないことを糾弾し、公式の謝罪を求める。しかし日本の保守派政治家らは、東京は空襲を受けたことで戦争のつけを払ったとか、過去はもう終わったなどと発言しては、そうした感情を踏みにじっているのである。

こうした痛ましい状況に対して平和活動家らは、個人個人の寄付による基金で建立されたささやかな養父母の公墓が日中両国の市民の心に訴えかけ、和解のメッセージを送るものになることを望んでいる。

また活動家らはこう信じている。もし公墓のような生きたシンボルが、今日の強硬派を揺さぶり、東アジアにおいて日本が十分に受け容れられるような土壌を育めるのなら、きっとよりよい未来が訪れるだろうと。

(猪股祐介・訳)

(解説：IPS通信社は、本部をローマに置き、第3世界の政治、経済、人権、環境問題を報道する通信社である。この原稿を執筆した日本在住のカクチさんは、巨大津波に襲われた母国スリランカの進まぬ復興に自ら救援プロジェクトを立ち上げた行動的な女性ジャーナリストだ。この原稿の反響は大きく、カナダのトロントの読者から、「このような感動

的な話をありがとう。涙が溢れてきました。中国と日本について知ることができる、このような素晴らしい話をもっとたくさんあったらと思います。そうした話は、必ずや日本と中国の和解という目的に寄与することでしょう。本当にありがとう」という便りが来た。また、IPS通信社の編集長は、方正友好交流の会のような動きが日本にも出てきたことに賞賛の声を上げ、記事を国連本部にも送付したとのカクチさんから報告があった。なおIPS通信社について、更に知りたい方は、www.ipsnews.netを見ていただきたい。）

再編総会に寄せられたメッセージ

再編総会の案内の際、葉書を入れ、出欠に関わらず一言メッセージをお願いした。頂いた全部また全文をページ数の関係で紹介できないのは残念だが、ほんの一部主に欠席された方を中心にご紹介します。出席と明記していないのは参加できなかった方々である。

1. 牛越充氏 (社) 信濃教育会会長

貴会再編に向けてのご準備等ご苦労様です。信濃教育会では長野県、県教育委員会等と協力し第25次の教育者訪中団を派遣いたします。10月の出発に向けて準備をしております。今年も方正県日本人公墓に墓参させていただき予定で。貴会のますますのご発展を祈念致します。

2. 神田忠亥氏 長野県開拓自興会会長

各開拓団、義勇隊のそれぞれの建立希望地を凝集し、日本人公墓に隣接して「和平友好の碑」を建立しました。日本人公墓の存在は大きく後世に引き継がれるものです。当会員は高齢化しており再建総会に参加できませんがご盛会をお祈りします。なお、公墓、友好の碑等の建立当時の中国要人が少なくなり一抹の淋しさを感じます。

3. 久保祐雄氏 方正ODA専門家団長

対立して居る日中関係が絡んだ折には公墓の建設・維持などに係る友誼に謝意を表すべきでしょう。高い立場から。それには、石井先生に比肩し得る方に会長または顧問などのグループリーダーになって入っていただくことが大切かと考えます。

4. 坂本龍彦氏 元朝日新聞編集委員

方正の慰霊碑については様々に伝えられており、鐘なども送られています。水田作りに大きな成果を挙げた藤原長作さん(故人)の事も方正の農民は忘れていないでしょう。そういう積み重ねがあるのです。

5. 佐藤洋一氏 日中友好協会理事

方正県の公墓の事は日本人として決して忘れてはならないことです。身勝手なナショナリズムが高まる中でこうした事実が忘れられていくことを心配します。お手伝いすることがあれば何かお申し付け下さい。

6. 片岡稔恵氏 作家

残留邦人の帰国に関わってきた1人として方正の日本人公墓、伊漢通の難民収容所を含めあの地で生かされた日本人のあったことも忘れてはならないと思っています。故石井先生のご

意志でもありましょうか交流の会再出発をありがたくうれしく受け止めております。今後のご発展を祈念致すと共に一人でも多く若者の参加をと願っております。

7. 新谷陽子氏

ジャーナリスト坂本龍彦さんがおっしゃっていました。「残留孤児たちは日本政府が受けるべき非難を一身に受けたという感慨を持っている」と。私は京都地裁で残留孤児裁判を3回傍聴しましたが、孤児の皆さんの中国大陸で受けた過酷な体験を知るほどに坂本氏のこの言葉の重みをかみしめました。方正友好交流の会が今後日中関係を改善していくための活動拠点となっていくことを信じています。

8. 王元怡氏 翻訳家

政府が頼りにならない時代になりつつ・・・結局昔も今も草の根交流しかないと思っております。これからもどうぞお声をおかけ下さい。よろしくお願い申し上げます。

9. 松尾友一氏

方正の日本人公墓の存在はもっともっと日本中に周知されるべきだと考えています。特に政治家は知るべきです。

10. 古賀勇一氏 福岡県の実業京都地区日中友好協会福会長（出席）

再編総会の盛会を記念します。海龍県で生まれ、西安、開原「方正」から内地へとかえりました。幼い日の半年間でしたが、わが家の歴史ではつかの間の幸せの日々でした。その方正が悲劇の地となり、中国の人びとの手で建立され、護られてきた日本人公墓があるとは初めて知りました。まさに日中友好の聖地です。「方正友好交流の会」にぜひ参加したいと思います。何ができるか不明ですが、残された生を微力ですが役立てます。

11. 新谷絵里氏

方正や麻山がこのまま忘れ去られていくのではなく、その存在を多くの人に知ってもらい、その意味を問い直す活動は重要なことだと思います。

12. 細川剛生氏 編集者

歴史をいつまでも風化させることなく、努力されることは意味あることと存じます。今後ともがんばって下さるよう祈っています。

13. 田中久子氏 （出席）

私は昨年夏、松田ちゑさん、奥村正雄さんら一行22名で、方正日本人公墓に墓参しました。日本が侵略したにも拘らず手厚く葬ってくれ、墓地は中国人の手によりきちんと管理されていて、とても印象的でした。中国の人たちが優しく、心温かいことがよくわかり、感謝の気持ちで胸がいっぱいになってしまいました。小泉総理も一度は是非方正日本人公墓に参拝するべきだと思いました。

14. 香山磐根氏 国際善隣協会専務理事

私は公墓を拝見していませんが、故石井氏の熱情に打たれ側面支援をしておりました。どうしても他の用件を取り消すことができず、出席したいと思いながら欠席のやむなきに至りました。申し訳ありません。

再編総会に寄せられた中国からの祝辞

方正友好交流の会 殿

貴会の創立を知って欣快に耐えません。謹んで22万県民を代表し、心からのお祝いを申し上げます。方正県と日本はユニークな歴史の縁があり、友好交流の長い歴史があります。近年、方正地区支援交流の会との息の合った連絡や協調によって、方正県と日本は経済や技術の面で大きな成果を上げました。方正地区支援交流の会が方正県の経済ならびに社会の発展のために、大きな関心と支持をいただきましたことに対し、心から感謝申し上げます。

貴会と力を合わせ、方正と日本の交流と合作を推進し、中日友好事業の発展を促進するために努力しましょう！

貴会の事業が順調に進みますよう、皆様が健康で万事順調でありますようお祈りいたします。

中国黒龍江省方正県人民政府

2005年6月19日

方正友好交流の会 設立総会へ

尊敬する会長先生：

ならびにご列席の先生がた：

方正友好交流の会設立にあたり、私は方正地区支援交流の会の発起人の一人として、また前会長・石井貫一先生の旧友として、大変感動しながら祝意を表します。

歴史の縁で方正県と日本は特別な関係を持ち、方正県の人民と日本の人民も血縁関係を持っています。長年にわたり、方正地区支援交流の会の皆さん（石井寛一会長、豊田利郎、森山誠之、牧野史敬、奥村正雄各先生）が方正県の経済発展と友好交流のために大きな貢献をしていただいたことを方正県の人民は決して忘れません。

方正友好交流の会の創立は、方正地区支援交流の会の事業の継続と発展であり、また方正県と友好交流の会の新しいステップの始まりでもあります。私たちはともに努力し、合作を強めて行きましょう。

方正友好交流の会の成功を祝し、中日両国人民の友好が世代々続きますように！

元方正県中日友好交流協会

常務副会長 王 鳳 山

2005年6月19日

「方正友好交流の会」 成立大会に寄せて

星移り、時代が変わろうと、天地が永久に存在するように
友情がいつまでも変わらぬことを希い、大会の成功をお祈りします

方正県日本語学校 校長 柳長晴、名誉塾長 王鳳山

2005年6月19日

ニュース

＊ 再編総会を終えて一ヶ月も経ない7月に入り、方正県政府代表団が日本を訪れているという知らせが方正出身の華僑仲間から入った。そこで急遽7月12日（火）午後4時から、日中科学技術文化センターの会議室で、「方正友好交流の会」の事務局メンバーと方正出身の華僑グループが、6人から成る方正県人民政府の代表団と会談した。

今回の来日目的は、日本から方正県への投資説明会や合作協議を東大阪で開催し、また方正出身華僑との友好を深めるためである。団長の孫柏仁県委書記は、方正県内に中日友好平和教育基地を建設する予定があること、方正出身の華僑が帰郷しても、和めるような華僑ガーデンという住宅建設を計画していることを明らかにした。

団長は、方正にある日本人公墓と日本人孤児や残留婦人にも触れ、死にかけた人や両親と死別した人たちを救った中国人の行為、また公墓の建立も人類の普遍的な人道的精神を表している。しかし公墓については、日本政府は理解しているとはいえないと述べ、当会の活動に敬意を表し、「方正友好交流の会」の新しい出発を祝して頂いた。

なお、代表団は孫団長の他、張國文・方正県人民政府県委常委・常務副県長、王徳君・方正県外事僑務弁公室・主任、史山楽・方正県弁公室・主任、庄曉宇・方正県国土資源環保局長、黄世波・方正県建設局長の方々である。



写真、左端が中国養父母公墓を建立した遠藤勇さん、その右の背広姿が団長の孫さん。
以下右側の5人が団員の方々である。

- * 6月24日(金)、都内・新橋の新橋亭で「東北地区連合会総会」が開かれた。満鉄会、大連会など旧満洲の居住地や職場の関係者で作る連合会で、このまとめ役である庵谷磐さんから、「方正の会のアピールをしたらどうか」という声をかけて頂いた。出席は16団体の代表とマスコミ、旅行社など34人。6月19日の再建総会の模様とこれからの取り組みなどを奥村正雄が報告した。
- * 7月23日(土)、四街道市文化センターで行われた神田さち子語り芝居「帰ってきたおばあさん」で、主宰側から「方正のチラシを配ってあげたい」という申し出があり、「方正をご存知ですか? 中国・方正にある日本人公墓を、いま、一人でも多くの人に知ってもらうために」を500部、配ってもらった。
- * 8月10日(水)、北京放送、中国国際放送局日本語部の王丹丹さんから大類に電話が入った。北京にいる王さんが偶然、インターネットで当会のことを知り、「この活動は大変いいことだと思い方正県の公墓を取材、地元の関係者や人々からたくさんの話を聞いた」そして「公墓のことや会のことを多くの人に知ってもらいたいと思うようになった」とのことだった。そして、特別番組を制作するために、取材したいという趣旨である。
翌11日(木)北京の傅順部長から電話があり、改めて、今なぜ公墓を日本人に紹介しようと思ったか、今後の会の活動内容などについて取材を受けた。放送日は先のことだと思っていたが、15,16日の両日放送された由、追ってCDが送付される予定なので、詳しい内容は、改めて会報第2号で報告したい。

方正友好交流の会 規約

- 第1条 名称 本会は、方正友好交流の会と称す。
- 第2条 目的 本会は、ハルビン市方正県に存在する日本人公墓及び、中国人養父母公墓の日本での周知につとめ、その維持・管理活動の支援、方正県を中心とする中国東北地方との友好交流を目的とする。
- 第3条 会員及び会費 本会は、国籍を問わず本会の目的に賛同した個人会員及び団体、法人会員によって構成される。個人会員の年会費は1口1,000円、団体、法人会員の年会費は1口10,000円とする。
- 第4条 事務所 本会は、事務所を社団法人 日中科学技術文化センター（東京都千代田区神田小川町3-6）に置く。
- 第5条 役員 本会に会長1名、事務局長1名、会計1名、会計監査1名、顧問、理事、を若干名置くものとする。
- 第6条 役員の任期 本会の役員の任期は2年とする。ただし、再任は妨げない。

- 第7条 役員の職務 本会の、(1) 会長は、本会を代表し会務を総括する。
(2) 事務局長は、会長の職務を補佐し、必要に応じてその職務を代行する。
(3) 会計は年度内の収支を把握記録し、会計報告を作成する。(4) 会計監査は、会計収支を監査監督する。(5) 理事は総会の決定により、その任務を遂行する。
- 第8条 総会 本会は、会長が召集し毎年1回総会を開く。なお、必要に応じ臨時に総会を開くことが出来る。総会においては、次の事項を議決する。
1、活動報告 2、会計報告 3、役員の承認 4、規約の変更
5、その他必要な事項
- 第9条 経費 本会の経費は、会費及び寄付金その他で支弁する。
- 第10条 会計年度 本会の会計年度は、毎年4月1日より始まり、翌年の3月31日までとする。

役員人事

会長：空席、事務局長：大類善啓
理事：寺沢秀文、林幹男、矢守幹男、武田正志、南誠、藤原知秋、今村春江
顧問：韓慶愈、金丸千尋、関洋一
事務局参与：牧野史敬、奥村正雄、木村直美

書籍のご案内

方正友好交流の会が編集した2冊の本をご紹介します。

- * 『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』 定価 1500 円
この本には、日本人公墓の建立の軌跡や由来を王鳳山と奥村が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み全身全霊で稲作指導に捧げ「日中友好水稻王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り、帰国後日中友好運動に携わり、麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類が執筆、また方正友好交流の会を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進行した記録などが収録されています。
- * 『日本と中国 その底辺を翔けた 70 年』 石井貫一 編著 定価 2000 円
再編前の会長であった石井貫一氏の中国国家友誼賞を記念して刊行されたもの。方正に関わる石井氏の足跡が綴られています。
この2冊は当会が扱いますので払込振替用紙をご利用ください。

＊ 『天を恨み 地を呪いました ―中国方正の日本人公墓を守った人々―』

奥村正雄 編著 定価 700 円

この本に書かれた文章は、上記の『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」―ハルビン市方正県物語』にも収録されていますが、日本人公墓建立の契機を作った残留婦人・松田ちよさんの息子さんの体験記も入っています。(この本に関しては、直接、奥村に申し込んでください。電話 043-272-9995 FAX 043-272-0214

E-mail : k.beijing@mx5.ttcn.ne.jp)

編集後記

再編総会までの忙しい日々、そしてなんとか総会を終えたという安堵感と疲労感の後に来たのが各方面からの大きな反響だった。感動した、支援をしたい、カンパしたいという電話を頂き、すぐにでも新生第1号の会報を出そうと思ったが、なかなかエンジンがかからない。中国との交流会の開催準備など多忙を極め、それでも休日を活用して会報の原稿を書き、整理して、やっと発行にこぎつけることが出来た。電話を頂いた方々には、会報を通してのご報告が遅れたことをご容赦願いたく思います。

再編総会を契機に、猪俣祐介さん、島田昭広さんという30代前半の行動力ある素晴らしい青年たちが参加してくれ、今後も大いに会の一翼を担って頂けるということなので心強く思っています。今号でも翻訳や編集の面で協力を頂いた。

会報のタイトルは4文字で表現できないかと事務局では考え、顧問の韓慶愈氏の知恵を借りた。「星火方正」は、燎原の火のように不戦と友好の動きが方正という地から広がるという意味である。この会報を中心にして、小さいながらも新しい動きが展開できたと思っている。会報を手にした方々は、ぜひこの会報を活用して頂き、大いに意見や原稿をお寄せ頂ければと思う。定期的に発行する自信もないので大きいことは言えないが、今後の日中関係の中で少しでも果たす役割があればと思っています。ご支援、ご協力をお願いする次第です。

(大類)

『星火方正 燎原の火は方正から』

2005年9月1日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email : ohrui@jcest.or.jp
東京都千代田区神田小川町3-6 住協会館 (社) 日中科学技術文化センター内
〒101-0052 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400
郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会